

「I'm So Happy You Are Here: Japanese Women Photographers from the 1950s to Now」 参加報告書

(2025 年 1 月 28 日～3 月 18 日 オランダ デン・ハーグ、イギリス ロンドン)

久後香純

日本学術振興会特別研究員 PD (京都大学)

2023 年度奨学生

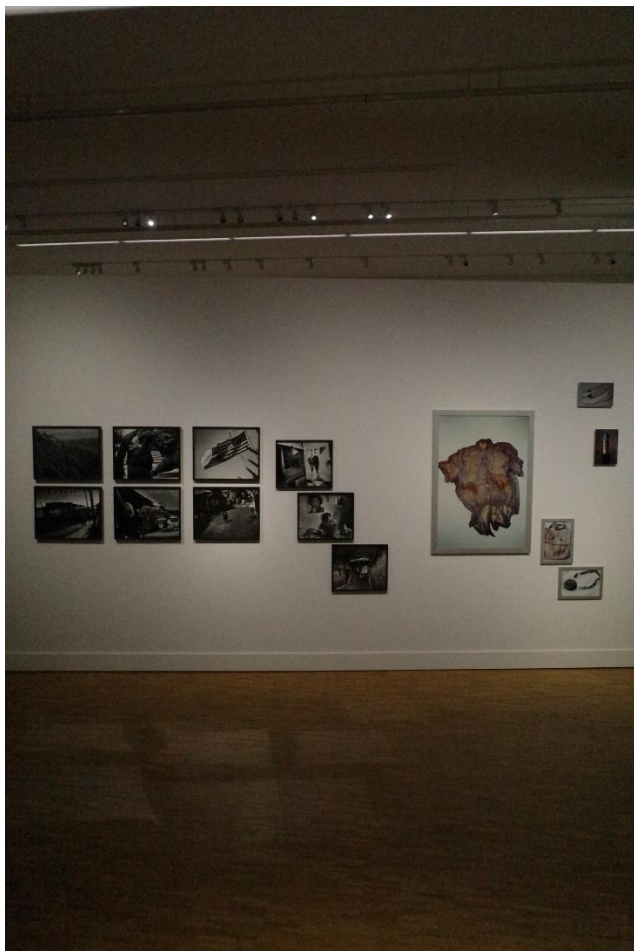
日本で活動する女性写真家を紹介する書籍「I'm So Happy You Are Here: Japanese Women Photographers from the 1950s to Now」が、ニューヨークの写真専門出版社アパチャー (Aperture) から 2024 年に刊行された。編集を手がけたのは、ブルックリン美術館のキュレーター、ポーリーヌ・ヴェルマーレ (Pauline Vermare)、非営利団体プリンテッド・マター (Printed Matter) のエグゼクティブ・ディレクター、レスリー・A・マーティン (Lesley A. Martin)、写真批評家の竹内万里子、ハートフォードアートスクールのキュレーター、キャリー・クッシュマン、そしてブリティッシュ・コロンビア大学の歴史研究者、ケリー・ミドリ・マコーミックだ。いずれも多様なバックグラウンドを持ち、日本国内外から日本写真史に関わってきた専門家たち——それも全員女性であることも特筆すべきだろう——がタグを組んで、作り上げたのが本書である。編者のヴェルマーレ、クッシュマン、マコーミック、竹内はそれぞれ、日本女性写真家の作品を理解するためのクリティカルかつ歴史資料に基づいた論考を寄稿しており、これから長きにわたって参照されるであろう重要な研究の礎が築かれた。またこれらの編者以外にも、フェミニズムの観点から展覧会を企画してきたパイオ

ニア、笠原美智子や、主にアメリカ合衆国で日本人アーティストを積極的に紹介してきた福のり子など、日本の女性写真作家を歴史化する上で重要な役割を果たしてきたプレイヤーたちからの論考、さらに常盤とよ子や石内都など作家自身の文章の初英訳も掲載されており、いずれも、日本女性写真家について海外で理解が広がっていくであろう重要な資料になっている。



書籍の刊行に伴って、2024 年 7 月にはアルル国際写真フェスティバルにて本書で紹介された

26名のアーティストの作品を展示する同名の展覧会が開幕した（会期：2024年7月1日～9月29日）。その後、同展覧会はオランダ、デン・ハーグのFoto Museum Den Haag（2025年1月18日～5月5日）、ドイツ、フランクフルトのFotografie Forum Frankfurt（2025年5月24日～9月7日）を巡回している。日本の女性写真家のみを取り上げた大規模な展覧会は史上初であるが、現時点で、日本での巡回予定は公式には発表されていない。筆者は渥美国際交流財団の海外学会等派遣プログラムの支援を受け、デン・ハーグでの展示を鑑賞し、その前後のロンドン滞在も含めて、出展作家や本展覧会のカタログに論考を寄せている研究者と意見交換をおこなうことができた。



1950年代から現代に至るまで、時代を代表する26人の作家による作品群が初めて一堂に会した今回の展示が示していたのは、日本社会に生きた女性の経験と視点によって創造された表現が多種多様であることだ。ドキュメンタリーの手法で日本社会に生きる女性の存在と経験を記録した石川真央、常盤とよ子、渡辺眸、あるいは日常的なかに育まれた親密な空間を慈しむように記録する潮田登久子や原美樹子、または写真という言葉が指す意味に挑戦し拡張を図る実験的な作品を作る杉浦邦枝や多和田有希など、彼女たちが写真というメディアに向かうアプローチは決して一元化できず複雑であり、多層的な可能性に開かれた展示空間が構成されていた。

結果として、日本写真史に興味を持つ人たちににとって欠かせない資料が提供されたことは間違いない。1978年にニューヨーク近代美術館で開かれた日本の写真を紹介する「New Japanese Photography」展以降、東松照明、森山大道、杉本博司など日本出身の写真家の仕事は世界各地で紹介され、日本人写真家の国際的なプレゼンスが確立されて久しい。そこにこれまで欠けていたのが女性写真家たちの存在だ。写真技術が日本に輸入されてから現在まで、女性たちは写真文化の発展に欠かせない貢献をしてきたにもかかわらず評価の対象からは外れ、歴史に名前を残す機会が少なかった。この展覧会と書籍で女性写真家の不在が可視化され、既存の「日本写真史」のカウンターパートを示すとともに、これまで欠けていたパーツが補われたことは率直に喜ばしい。実際にオランダで展覧会を訪れて印象的だったのは、ハーグ市民と思われる多くの鑑賞者たちが展覧会に足を運び、興味深げに作品を鑑賞していたことだっ

た。彼らは、時間をかけてじっくり作品をながめ、壁に記されたキャプションを読み込み、互いに作品の感想を語り合っていた。



日本で生まれ育ち、写真史を専門に研究する筆者としては、異国の地で日本女性写真家の作品が熱心に鑑賞されている光景に立ち会うことができたのは感動的な瞬間だった。それと同時に、この企画が国内からではなく海外において立ち上がり、実現し、完結したという事実については、これからその理由を批判的に考えていく必要があるだろうと考えている。——もし、日本国内での巡回が実現するならば、それは素晴らしいと思う。国内でこの展覧会や書籍以上に大規模に女性写真家について取り扱われた例は未だかつて存在していない。「I'm So Happy You Are Here」展は海外に日本人作家を紹介する役割を超え、国内の写真表現に関心を寄せる人々にとっても貴重な資料となるはずだ。